

始聞しもん仏乘ぶつじよう義ぎ

建治四年（一二七八）二月二十八日。五十七歳。於身延。富木常忍宛。九紙完  
 中山法華經寺藏。（定一四五二頁 原漢文）

青鳧七結、下州より甲州に送らる。其の御志悲母の第三年に相当る御孝養なり。

問う、「止観明静前代未聞」の心如何。答う、円頓止観なり。問う、円頓止観の意何。答う、法花三

味の異名なり。問う、法花三味の心如何。答う、夫れ末代の凡夫、法花經を修行する意に二あり。一に

は就類種の開會、二には相對種の開會なり。問う、此の名は何れより出ずるか。答う、法花經の第三藥

草喻品に云う「種相体性」の四字なり。其の四字の中に第一の種の一字に二あり。一には就類種、二に

は相對種なり。其の就類種とは釈に云く、「凡そ心有る者は是れ正因の種なり。随いて一句を聞くは是

了因の種なり。低頭挙手は是れ縁因の種なり」等云云。其の相對種とは煩惱と業と苦との三道、其の当

体を押えて法身と般若と解脱と稱する是なり。

其の中に就類種の一法は宗は法花經に有りと雖も、少分は又爾前の經々にも通ず。妙樂云く、「別教は唯

就類の種有りて而も相對なし」と云云。此の釈の別教と云うは、本の別教には非ず。爾前の円、或は他師

の円なり。又法花經の迹門の中「供養舍利」已下二十余行の法門も大体就類種の開會なり。問う、其の

相對種の心は如何。答う、止観に云く、「云如なるか聞円の法なる。生死即法身・煩惱即般若・結業即

解脱なりと聞く。三の名有りと雖も而も三の体無し。是れ一体なりと雖も而も三の名を立つ。是の三即

ち一相にして其れ実に異有ること無し。法身が究竟なれば般若も解脱も亦究竟なり。般若が清浄なれば

ば余も亦清浄なり。解脱が自在なれば余も亦自在なり。一切の法を聞くこと亦是の如し。皆仏法を具して減少する所無し。是を聞円と名く」等云云。此の釈は即ち相對種の手本なり。其の意如何。答う、生死とは我等が苦果の依身なり。所謂五陰・十二入・十八界なり。煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑なり。結業とは五逆・十惡・四重等なり。法身とは法身如来、般若とは報身如来、解脱とは応身如来なり。我等衆生無始曠劫より已來此の三道を具足し、今法花經に値いて三道即三徳となるなり。

難じて云く、火より水は出でず、石より草は生ぜず。悪因は悪果を感じ、善因は善報を生ずるは、仏教の定まれる習いなり。而るに我等其の根本を尋ね究むれば、父母の精血赤白二滯和合して一身と爲る。惡の根本不浄の源なり。設い大海を傾けて之を洗うとも清浄なるべからず。又此の苦果の依身は其の根本を探り見れば貪瞋癡の三毒より出づるなり。此の煩惱・苦果の二道に依りて業を構う。此の業道即ち是れ結縛の法なり。譬えば籠に入れる鳥の如し。如何ぞ此の三道を以て三仏因と称せんや。譬えば糞を集めて栴檀を造れども終に香しからざるが如し。

答う、汝が難大いに道理なり。我も此の事を弁えず。但し付法藏の第十三天台大師の高祖竜樹菩薩、妙法の妙の一字を釈して、「譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云。毒と云うは何物ぞ。我等が煩惱・業・苦の三道なり。薬とは何物ぞ。法身・般若・解脱なり。能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ。三道を變じて三徳と為すのみ。天台云く、「妙をば不可思議と名く」等云云。又云く、「夫れ一心、乃至不可思議境、意此に在り」等云云。即身成仏と申すは此れ是なり。近代の花嚴・真言等、此の義を盜